

解説

新郷啓子



本作の著者マリア・ヘスス・アルバラド (Maria Jesus Alvarado) は、スペインのカナリア諸島に暮らす郷土作家だ。一九六〇年にグ

ラン・カナリア島のラス・パルマスに生まれ、バルセロナ大学で文学と心理学を学んだ。現在、文筆活動の他に、出版社を共同経営し、ドキュメンタリー映画製作も手掛けている。著書には『奇妙な滞在 (Estraña estancia)』(二〇〇六年)、『偶然の地理学 (Geografía accidental)』(二〇一〇年)、『トウルク島 (Isla Truk)』(二〇一〇年)、『亀裂 (Grietas)』(二〇一二年)、『霧雨 (Sorimba)』(二〇一四年)、『戻ってきた星の王子さま (El Principio ha vuelto)』(二〇一五年)がある。ドキュメンタリー映画には『サハラの扉 (La puerta del Sahara)』(二〇〇六年)、『シャッターの手紙 (La carta de Chaddad)』(二〇〇六年)、『時の中で踊る (Bailando en el tiempo)』(二〇〇九

年)、『やってくる (Cuando llegue)』(二〇一四年)、『黒衣の女 (La N'visse de negro)』(二〇一五年)、『三毛、人生は旅 (San Mao, la vida es el viaje)』(二〇一六年)があり、どれも西サハラあるいはカナリア諸島を題材としている。

著者は、子供時代を、家族と共に当時、スペインの植民地であった、スペイン領サハラのピリャ・シスネロス (現在のダーフラ) とエル・アイウンで過ごした。しかし歴史の変転の下で、当地からの離郷を余儀なくされた、いわゆる引揚者だ。現在西サハラと呼ばれるこの地域が、アフリカの他の植民地が遂げた脱植民地化の過程を奪われ、隣国による占領が開始する時のことだった。

スペイン領サハラでは、一九七〇年代、国連や国際司法裁判所が求める民族自決権の住民投票の実施が予定されていた。しかし宗主国スペインが脱植民地化のプロセスを放棄して、一九七五年十一月、当時領有権を主張していたモロッコ、モーリタニアと秘密協定を結んで植民地を分割譲渡した。これにより両国軍が西サハラに侵攻し、住民の多くが東のチンドウフ (アルジェリア) へと逃れ、難民キャンプを築く。植民地に暮らしていたスペイン人は、この年に次々と本国へ帰還した。

西サハラの人民解放軍であるポリサリオ戦線は、侵攻したモロッコとモーリタニアの両国

を相手に解放戦争を展開し、モーリタニアは一九七九年に同戦線と和平協定を結んだ。しかし、モロッコは西サハラに分離壁の建設を開始し、一九八七年に完成した長さ二千七百キロメートルの壁は、西サハラの領土を縦に分断してしまふ。それ以来、サハラ・ウィと呼ばれる西サハラの民族は、モロッコの占領地とアルジェリアにある難民キャンプに二分されたままだ。

著者マリア・ヘスス・アルバラドが故郷として胸に抱くダーフラやエル・アイウンのある西サハラは、今ではモロッコの占領下に置かれ、まったくの単なるツーリストでない限り、今日、外国人には訪問しにくい地域になっている。万一訪問できたとしても、隣国による占領の現実には著者の追憶を圧殺し、胸の想いは唯々傷つくばかりだろう。

本書の原題の Suete Mulana という言葉は、スペイン語と、サハラ・ウィの母語でアラビア語の西サハラ方言のハサニーヤ語との複合語だ。suete はスペイン語で「運」、mulana はハサニーヤ語で「我らの主」を意味し、インシャー・アッラーやケ・セラ・セラのように用いられる。この言葉は当時の植民地スペイン領サハラで生まれたもので、今ではもう使われていない。二つの言語の結合、それも具象語ではなく抽象語が結合した慣用語という点が、当時、サハラ・ウィと入植者スペイン人との間に存在した社会

的、文化的な融和を感じさせる。この時代を植民地で生きた人々だけが知る複合語だ。

本の表紙を飾る絵は、著者自身が八歳の時に小学校で描いたもので、その後教師の手に保管され、著者自身、その存在を知りもしなかった。ところが本書の出版を知った旧教師が、この絵こそ表紙にふさわしいと提供してくれたそう。まだ若い著者が、サハラ・ウィ・ミュージシャンの衣装やさまざまな小道具をこれほど細かく描くことができた、その観察眼には驚かされる。と同時にそれは、子どもだった著者の心を掴み、躍らせたものが、その土地で育まれていた文化であったことを物語っている。少女マリアリヘス・アルバラドの心は、サハラ・ウィと同じ地平線、水平線を見ながら育ったのだ。

本書は「詩」(Poema)と名付けられた三つの章で構成され、その中にまた、幾つかの長短の話が収められている。

詩Iはスペイン領サハラを舞台とした「ピオレタの話」、詩IIは難民キャンプを舞台とした「チンドウーフの星」、そして詩IIIは子供時代の家とその日々を一枚の絵のように描いた「青い背景の思い出」。今回ここに抄訳したのは、詩I「ピオレタの話」の中から選んだ三つの話だ。

この詩的テキストは、単に思い出を物語形式に書き変えたものではない。ここには、著者が

長年胸にしまい続けていたものが浸み込んでいる。それは郷愁を、ただ郷愁として愛おむことさえ許されないとこから生じる憂いだ。そういう胸中のある風景を打破しようと、著者はこのテキストを書き始めたのだろう。

本書の「はじめに」の中で著者は、「子供時代とは人生の旅路にある特別な区間」と称している。その特別な区間の土地を再び訪ねることが奪われている今、彼女はこの憂いを *suerte mala* の言葉を使った人々、これを知っている人々——サハラ・ウィとスペイン人——と共有しようとしたのだ。そしてさらには、この旧植民地が抱える今の現実を知らない人々、あるいは知りながらも見ようとしぬ人々に対して、詩的な扉から現実の光景へ歩を進めてもらおうとしているのが、本書だ。こうして著者は孤独な夢み人とはならず、明日の夢を見知らぬ人々と共有する段階へ一歩踏み出したことになる。

詩I「ピオレタの話」には、地名が登場して場所は特定されているが、時代は記されていない。確かにスペインの小学校のように植民地時代を匂わせる歴史的要素はあっても、ここではむしろ二つの民族の共生と共存の側面が浮き彫りにされている。つまり、もしスペインが歴史的責務を遂行して脱植民地化を行い、モロッコによる占領を不可能にしていたならば、おそらく現在の西サハラには、祖父と魚釣りに出かけ

るピオレタ、文字を反対方向に綴るピオレタ(クラスの大半を占めるのは当時とは逆にムスリムの子たちだが)、そしてハイマに穴を作るアイシャがいる社会があるはずなのだ。時代が特定されていない「ピオレタの話」には、未来にもこれが可能となってもraitたいという作者の願いが込められているのではないだろうか。

最後に、地図を見れば明らかのように、カナリア諸島はアフリカ大陸の離れ島だ。最近のDNA考古学によると、最初にカナリア諸島に住んだ住民は、紀元前一千年頃に北アフリカから渡来したベルベル人らしい。だとすればスペイン領サハラに住み、砂漠をこよなく愛したカナリア人たちの内側では、はるか遠くの祖先の遺伝子が息を吹き返していたのかもしれないと想像したくなる。



Suerte Mala 表紙絵